

古典文法 助動詞④ 「る、らる」

文法的意味

|      |      |                      |
|------|------|----------------------|
| る・らる | 「自発」 | 「(自然と)―する、(自然と)―される」 |
|      | 「可能」 | 「―できる」               |
|      | 「受身」 | 「―される」               |
|      | 「尊敬」 | 「―なさる、お―になる」         |

見分け方

|                        |          |
|------------------------|----------|
| ・「思ふ、嘆く、泣く」など + 「る、らる」 | ＝ 「自発」   |
| (思考・心情を表す語)            |          |
| ・「る、らる」 + 「ず」          | ＝ 「可能」   |
| ・「―に + 「る、らる」          | ＝ 「受身」   |
| ・貴人が主語か「仰せらる」          | ＝ 「尊敬」   |
| ・「れ給ふ、られ給ふ」            | ＝ 「尊敬以外」 |

【練習1】 傍線部を口語訳し、そこに含まれる助動詞「る、らる」を文法的に説明せよ。

(例文) 風波やまねば

(口語訳) 止まないの (文法的説明) 打消の助動詞「ず」の已然形。

1 また時の間の烟とも成りなんとぞ、うち見るより思はる。

2 住み馴れし古里、限り無く思ひ出でらる。

3 仏の御飾り、花机の覆ひなど迄、実の極楽思ひ遣らる。

(いくら立派な屋敷であっても) きっとまたすぐに焼け失せて煙となるだろうと、見るやいなや――。  
〈徒然〉

住み慣れたふるさが、――。  
〈更級〉

仏像のお飾りや、仏具の花机の覆いなどまで、どれも――(ほどの美しさだ)。〈源氏・賢木〉

4 言はむ方無く、あはれ悲しと思ひ嘆かる。  
あはれ ああ

5 彼も然こそ心を遣りて遊ぶと見ゆれど、身はいと苦  
しかかなり、と思ひ比へらる。  
思ひ比ふ 連想する

6 人の程 心ばへなどは、物言ひたるけはひにこそ物越  
しにも知らるれ。

物越し（几帳や簾、障子など）何か物を隔てている状態

7 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚か  
れぬる

驚くはつと気づく ぬる 完了の助動詞「ぬ」の連体形。―た

8 御鼻の色許り霞にも紛るまじう花やかなるに、御心  
にもあらずうち嘆かれ給ひて、殊更に御几帳ひきつ  
くろひ隔て給ふ。

うち嘆く 溜め息をつく。「嘆く」に同じ。「うち」は接頭語 給ふ  
尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる

9 薬師仏の立ち給へるを見捨て 奉る悲しくて、人知  
れずうち泣かれぬ。

うち泣く 泣く。「うち」は接頭語 ぬ 完了の助動詞「ぬ」の終止  
形。―た・てしまう

（姉が亡くなり、）なんとも言い  
ようが無く、――。〈更級〉

あの水鳥も水面では気晴らしし  
て遊んでいるように見えるけれ  
ど、水中では足で水を掻き大層  
苦しいようだ、（まるで自分自  
身ようだ）――。〈蜻蛉〉

人の品格や気立てなんかは、そ  
の人が話している様子によつて、  
――。〈徒然〉

秋が来たと目にははつきり見え  
ないけれども、風の音に秋の訪  
れを――。〈古今〉

（末摘花の君は相変わらずみす  
ぼらしい容姿だが、）お鼻の色だ  
けは、春霞にも隠れそうに無い  
ほど赤く目立っていて、（光源氏  
はそれを見て）思わず――、わざ  
わざ御几帳を置き直して末摘花  
と隔てなさる。〈源氏・初音〉

（いつもこっそり拝んでいた）  
薬師仏の像が立っていらつしや  
るのを見捨て申上げるのが悲し  
くて、ひそかに――。〈更級〉

10 ː。」と微笑み給へる、若ううつくしげなれば、我も  
うち笑まるる心地して、

うち笑む 微笑む・笑顔になる。「うち」は接頭語 心地 気持ち

11 名を聞くより、やがて面影は推し測らるる心地する  
を、見る時は、また予ねて思ひつるままの顔したる  
人こそ無けれ。 面影 顔つき

12 「此処は何処とか言ふ。」と問へば、「子しのびの森と  
なむ申す。」と答へたりしが、身に比へられて、いみ  
じく悲しかりしかば、  
身我が身自分自身 比ふ 連想する・似たものとみなす

13 めでたしと見る人の、心劣りせらるる本性見えん  
こそ、口惜しかるべけれ。 心劣りがっかり・幻滅

14 上には時々夜々も上りて、知らぬ人の中にうち臥し  
て、つゆまどろまれず。

つゆ 呼応の副詞。少しも・全く（―ない） まどろむ 眠る  
ず 打消の助動詞「ず」の終止形。―ない

15 恋しからむ事の耐へ難く、湯水飲まれず、同じ心に  
嘆かしがりけり。 ず 打消の助動詞「ず」の連用形。―ない

ː。」と言って光源氏が微笑みなさった様子が、若々しく美しいので、命婦は自分も――、〈源氏・末摘花〉

誰かの名前を聞くや否や、すぐに――気持ちがするものだが、実際に会ってみると、やはり前もって想像していたとおりの顔をしている人はいない。〈徒然〉

「ここは何という地名か。」と尋ねると、「子しのび（子を思い慕う意）の森と申します。」と答えたので、（都に娘を残してきた）――、たいそう悲しかったので〈更級〉

立派だと思っていた人が、――本性をもし見せるならば、残念であるに違いない。〈徒然〉

中宮様の部屋には時々何夜か上がって、知らない人の中で横になって、――。〈更級〉

（かぐや姫が月に帰ると）恋しくなるだろう事を考えると耐え難いほどで、――、同じ気持ちで嘆いた。〈竹取〉

16 抜ぬかんとするに、大方おほかた抜ぬかれず。

大方 呼応の副詞。全く（—ない） ず 打消の助動詞「ず」の連用形。—ない

17 堀川ほりかはどの殿にて、舎人とねりが寝ねたる足あしを狐きつねに食くはる。

18 物ものに襲おそはるる心地こころして驚おどろき給たまへれば、

物物の怪 心地 気分

19 指ゆびをさして人ひとに笑わらはるるとも、其それをば顧かへりみず、  
とも 逆接仮定の接続助詞。たとえ—としても

20 人ひとに侮あなづらるるもの。築土ついでちの崩くづれ。

侮る 輕蔑する・馬鹿にする

21 大将だいしやう 暇いとま申まうして、福原ふくはらへこそ帰かへられけれ。  
けれ 過去の助動詞「けり」の已然形。—た

22 彼かの大納言だいなごんは何いづれの船ふねにか乗のらるべき。  
べき 推量の助動詞「べし」の連体形。—だろう

23 今いまは昔むかし、治部卿ちぶきやう通俊卿みちとしきやう 後拾遺ごしゆいを撰えらばれける時とき、

頭にかぶった鼎かなえを引き抜こうとするけれども、——。〈徒然〉

堀川殿（太政大臣久我基具）のお屋敷で、警備の男が、寝ていた足を——。〈徒然〉

——（光源氏が）目覚めなされると、  
〈源氏・夕顔〉

（能の稽古においては）——、それを気にせず、〈風姿花伝〉

——。土塀の崩れ。〈枕〉

大将（藤原実定）はお別れを申し上げて、福原の都へ——。〈平家〉

あの大納言は、どの船に——。  
〈大鏡〉

今となつては昔の話だが、治部卿である藤原通俊卿が後拾遺和歌集に入れる歌を——時に、〈宇治拾遺〉

24 「別<sup>わか</sup>れは知<sup>し</sup>りたりや。」となむ仰<sup>おほ</sup>せらる<sup>つた</sup>ると伝<sup>つた</sup>ふるも、  
いとをかし。 仰<sup>おほ</sup>す おつしやる

25 片<sup>かた</sup>仮<sup>かん</sup>名<sup>な</sup>の子<sup>ね</sup>文<sup>も</sup>字<sup>じ</sup>を十二書<sup>か</sup>かせて給<sup>たま</sup>ひて、「読<sup>よ</sup>め。」と  
仰<sup>おほ</sup>せられければ、

仰<sup>おほ</sup>す おつしやる けれ 過去の助動詞「けり」の已然形。―た  
ば 順接確定条件の接続助詞。―ので

26 「少<sup>せう</sup>納<sup>な</sup>言<sup>ごん</sup>よ、香<sup>かう</sup>炉<sup>ろ</sup>峰<sup>ほう</sup>の雪<sup>ゆき</sup>如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>ならむ。」と仰<sup>おほ</sup>せらる<sup>つた</sup>れば、  
仰<sup>おほ</sup>す おつしやる ば 順接確定条件の接続助詞。―ので

27 人<sup>ひと</sup>の御<sup>おほん</sup>様<sup>さま</sup>の、言<sup>い</sup>ひ出<sup>い</sup>で給<sup>たま</sup>ふ事<sup>こと</sup>の趣<sup>おもむき</sup>より、片<sup>かた</sup>方<sup>へ</sup>は臆<sup>おく</sup>  
せられ給<sup>たま</sup>ふなんめり。

臆<sup>おく</sup>す 気後れする 給<sup>たま</sup>ふ 尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる

28 折<sup>をり</sup>々<sup>こと</sup>の事<sup>おも</sup>思<sup>い</sup>ひ出<sup>たま</sup>で給<sup>たま</sup>ふに、よよと泣<sup>な</sup>かれ給<sup>たま</sup>ふ。  
給<sup>たま</sup>ふ 尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる

29 寝<sup>ね</sup>られ給<sup>たま</sup>はぬま<sup>たま</sup>まに、「我<sup>われ</sup>はかく人<sup>ひと</sup>に憎<sup>にく</sup>まれても習<sup>なら</sup>  
はぬを、 ぬ 打消の助動詞「ず」の連体形。―ない 給<sup>たま</sup>ふ 尊敬の  
補助動詞。―なさる・お―になる

30 「あまりけにくし。」と、人<sup>ひと</sup>にも言<sup>い</sup>はれ給<sup>たま</sup>ひき。  
給<sup>たま</sup>ふ 尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる き 過去の助動詞  
「き」の終止形。―た

「別れの悲しさを知っているか。」と（中宮定子が）――と伝え聞くのも、とてもおもしろい。  
〈枕〉

帝が片仮名の子の文字を十二個書いてお与えになり、「これを読め。」と――〈宇治拾遺〉

「少納言よ、香炉峰の雪とはどの様であろうか。」と中宮定子が――〈枕〉

人（藤原道長）のご様子が、その発言なさる内容に迫力があつたために、もう一方の方（藤原伊周）は――ようだ。〈大鏡〉

その時々<sup>とき</sup>の事を思い出しなさると、おいおいと――。〈源氏・須磨〉

――ので、「私はこのように人に嫌われることには慣れていなかったが〈源氏・空蟬〉

「あまりに無愛想だ。」と、周囲の人にも――。〈大鏡〉